



う。これまでモンゴルの小説に描かれてきた日本人は、ハルハ河戦争（ノモンハン事件）をテーマとする小説や第二次大戦終結直前の内モンゴルや中国東北部での対日戦を描いた小説に登場する場がほとんどで、しかもかなり戯画化されステレオタイプ化された軍人や特務機関員ばかりだったが（4）、ガンバトの小説に登場する日本人抑留者ヤマダは、従来の日本人像とはだいぶ異なっていることがわかる。

ここではガンバトの小説にふれる前に、やはり同じような題材を取り上げて数年前に話題となった映画をまず紹介し、従来の映画に描かれた日本人像との差異を確認してから、本題に入ることしよう。

#### 1 映画の中の日本人抑留者

一九九二年制作のモンゴル映画「渡り鳥の還る秋」<sup>5</sup>は、人気女性歌手サラントヤアの挿入歌とともに、日本人抑留者アキラとモンゴル人の娘ムンフマーの悲恋を描いたことで、公開当時大きな反響を巻き起こしたという。私自身は一九九六年にウランバートル滞在中、たび重なる停電にもめげず、テレビでこの話題の映画を観る機会に恵まれた。

場所は定かではないが、伐採した木材を川でいかだに組んで運ぶ二十人ほどの日本人捕虜が登場する。季節は夏。川で溺れた子山羊を救った縁でアキラとムンフマーは知り合いになる。徐々に惹かれてゆく二人は密会を重ね、やがて結ばれる。二人の関係に気づいた日本人の隊長の命令で、アキラは仲間たちから制裁を加

えられるが、逢瀬は続いてゆく。ところが、ムンフマーの養父で捕虜管理責任者のバルタンにとうとう密会現場を目撃されてしまい、娘はバルタンからひどい折檻を受ける。アキラの方は丸太にくくりつけられて川に放り込まれる懲罰を受けるが、命からがら脱出する。やがて秋が訪れ、渡り鳥が南に還って行く季節となり、日本人抑留者にも出国命令が出る。こうしてアキラとムンフマーにもつらい別れの時がきた。いよいよ出発の日、近在の牧民たちに見送られ、隊列を組んで歩いて行く捕虜たち。バルタンによってゲルに閉じこめられたムンフマーは、アキラに会いたい一心で何とか扉を破って出て行く。川の向こう岸にたえずむむムンフマーの姿を認めたアキラは隊列をひそかに離れ、彼女の方へと足早に向かう。これに気づいた隊長はアキラを追いかけるが、アキラの方は追手を逃れようと川べりの崖に駆け登って行く。ところが、気が動転していたのか、高い崖の上から誤って足を踏み外し川に転落してしまう。それを対岸で泣きながら見ているムンフマー。川面にはアキラの形見とも言える竹笛が浮かんでいる。そしてラストは、捕虜たちが陽光を受けながら丘の上を隊列を組んで遠ざかって行くシーンで終わる。

以上がこの映画のあらすじで、古色蒼然たるメロドラマ仕立てにうんざりする向きもあると思うが、従来のモンゴル映画に描かれた日本人像を知っている身には、それなりに新鮮な驚きがある。

有名な馬頭琴奏者ロブサン・ホールチが老人役で出演した戦意高揚映画「恐れを知らぬ愛国者」（一九九二年制作、M・ロブサン・ジャムツ監督）に忍者のようないでたちの異様な日本兵が登場

して以来、モンゴル映画にはさまざまな日本人が登場してきたが、それらはみな「出っ歯で」「黒縁の眼鏡をかけた」「小柄の」「残虐非道な」「サムライ(軍人)」ばかりだったと言っても過言ではない。ところが、バイルフイーが演じるアキラは、人間的な感情を持った好青年として描かれている。サラントヤの歌をバックにしてアキラとムンフマーが美しい自然の中で戯れる姿は、アキラの古びた軍服姿を除けば、最近のモンゴルの青春映画とほとんど変わるところはない。捕虜たちが木材をいかに組んで川を下るシーンでは日本の唱歌「赤とんぼ」が流れる。彼らの仕事ぶりを遠目に見ていた老人が日本人の勤勉さを讃えたり、彼らが出発するときに近在の牧民が総出で見送ってくれたりする姿も従来では考えられなかったことである。捕虜を見送る人びとの中には、モンゴルの伝統に従って、乳を撒いて道中の安全を祈願する婦人もいた。

以上の簡単な紹介からもわかるように、「渡り鳥の還る秋」に登場する日本人抑留者アキラの姿は、これまでのモンゴル映画に描かれた日本人像とは明確に一線を画するものと言えるだろう。

## 2 小説の中の日本人抑留者

ここで取り上げる小説「生きてゆかなければ」は、前述したように雑誌『ツォグ』の一九九一年の第三、四号に発表されたが、小説の末尾には「一九九〇年六月三日脱稿」の記述がある。ここではまず、小説の作者リンチンギン・ガンバトの経歴について簡単に述べておこう。

ガンバトは一九四六年、モンゴル北部のセレンゲ県マンダル郡

のズーン・ハラールで生まれた。小説の舞台となっているハラールやハラール収容所は彼の生まれ故郷にある。モンゴルにおける日本人の抑留は一九四五年十月から四七年十月までの二年間にわたるが、彼の生年から考えると、小説はもちろん実体験に基づいたものではなく、さまざまな資料、取材、聞き書きなどに基づいて創作したものと思われる。ガンバトはセレンゲ県の十年制中学校を卒業後、モスクワ大学のジャーナリズム学科に留学し、一九六八年に卒業している。これを見ても、ジャーナリストとしての取材力が小説の背景にあることがうなずけよう。七〇、八〇年代はラジオ・テレビ国家委員会に勤務するかたわら、小説の創作にも従事していた。デビュー作と見られる小説「最後の汽車」は、一九七二年に『ツォグ』に発表されたものである。作品集には『ハラール小説集』(一九八二年)、『子駱駝の目』(一九九〇年)、『斑の馬』(一九九六年)などがある。八〇年代末から九〇年代には映画脚本や翻訳なども数多く手がけている。

小説の冒頭は主人公の少女ボルマーが「毛むくじやらの怪物」に追われる夢が始まる。実は映画「渡り鳥の還る秋」も、主人公のムンフマーが棒を握りしめた養父バルダンに追いかけられる夢のシーンで始まっている。「毛むくじやらの怪物」はボルマーが忌み嫌う看守長のニヤムジャブを指しているようにも読めるが、明示されてはいない。むしろ多感な十七歳の少女ボルマーの漠然とした不安感を象徴しているのであろう。

小説は終戦の翌年、すなわち一九四六年の春、前年の秋からウランバートルで都市建設に従事していた日本人捕虜がハラール地方に移送され、秋に出国命令が出て去ってゆくまでの期間の物語で

ある。実際に日本人抑留者が出国するのは、前述したように翌一九四七年の秋であるが、小説では一九四六年となっているように読める。日本人捕虜はハラ―農場での農作業、ジャガイモの貯蔵庫の建設、酒精工場の修理などに従事する目的で移送されてきた。ハラ―地方には、二〇年代から国営の農場が開かれ、三〇年代になってから収容所ができた。またこの地方には、ウランバートルからスフバートル、ナウシキを経由してウラン・ウデでシベリア鉄道と合流する鉄道が通っているが、当時はまだ建設途上にあり、この鉄道建設に動員するために多数のロシア人女性だけを集めた特別の収容所もあったことが小説に出てくる。

小説の主な登場人物は、主人公のボルマーと日本人抑留者ヤマダ、ハラ―収容所の看守長ニヤムジャブ、同収容所の看守ポルドーン、同収容所の内務省全権代表ガラム（バラムIIガラム）、野菜貯蔵庫の管理人ナムハイ、そしてボルマーの母でハラ―収容所の倉庫部管理人ハンドラである。小説は「この春で十七歳になった」「氣立ての良い、瘦せた、物思いに耽るような目つきをした、聡明で慎み深い娘」(二一―三三)ボルマーの目を通して語られる。

ボルマーは野菜貯蔵庫の中で看守長のニヤムジャブに乱暴されそうになってから、彼を毛嫌いしている。ニヤムジャブの人間像は、むしろこれまでのモンゴルの小説の中に描かれてきた日本人像を彷彿とさせるものがある。「背は曲がり」「出っ歯で」「口臭がひどく」「人間性のかけらもない」「傲慢で」「残忍な」男で、いつも内務省の緑色の帽子をかぶり、腰には六連発の回転式の拳銃を下げ、周囲を威嚇している。これに対して、ニヤムジャブの部下の看守ポルドーンは「内気な」「臆病な」「恐妻家で、「小柄で太っ

た」根っからの怠け者として描かれている。ボルマーにとっては嫌悪とともに哀れみをも誘う男である。野菜貯蔵庫の管理人のナムハイは、一九三九年のハルハ河戦争(ノモンハン事件)に参戦して足を撃たれ、その後遺症で今でも片足を引きずって歩いている無口な男であるが、ボルマーの良き理解者の一人でもある。ボルマーの母ハンドは、戦時中夫に先立たれてから、ハラ―収容所の倉庫部の管理人をしているが、「機嫌を損ねると人の命など虫けらほどにも思わない」収容所管理局が、哀れな母子に同情して、母親を倉庫の管理人に任命したのは、「実際のところ大臣に任命するよりもすごいこと」(二二―二五)だったのだ。

「昔話にあるあの乳海を渡り、須弥山を越えてみたい。世界とこの無限に広いのだから。本当に乳海や須弥山を越えて、果てしない遠くへ行ってみよう」(三一―三四)と夢想するボルマーの元に、本当に海の向こうから日本人がやってくる。ウランバートルから移送されてきた八十人ほどの日本人捕虜は、収容所倉庫部と野菜貯蔵庫の近くにある「黒色の高い板塀に囲まれた長い土房」に収容される。到着した翌朝、看守長のニヤムジャブがボルマーの家にきてそれを告げる。お茶を飲んでいるニヤムジャブの元に、部下の看守ポルドーンが収容所長の命令を伝えにくる。野菜貯蔵庫管理人のナムハイが捕虜のための寝具を受け取りに倉庫にやってくるので監督せよとのことである。

やがてナムハイがやってくる。ところがナムハイは一人ではなく、馬車の荷台に一人の見知らぬ男を乗せている。それがヤマダだった。ナムハイに連れられてゲルに入ってきたヤマダを初めて見たボルマーは、次のような矛盾した印象を持つ。

「日本人ていうのはこんな人だったんだ。あの『マタル(鰐)』(第二次大戦中に発行されていた風刺漫画雑誌)に載っていた絵とは全然ちがう。歯もニヤムジャブみたいに出っ歯じゃないし。歯並びの良い真つ白いきれいな歯だわ。去年の夏、収容所に来てコンサートで歌っていた軍楽隊の若者に似ているみたい。でもとても疲れた様子をしている。ウランバートルの湿った牢屋に入れられて、その上つらい建設労働をしていたんだもの、仕方ないわね。このハラ―地方の澄んだ空気を吸えばすぐに良くなるわ。少なくとも野菜や乳製品はたくさんあるもの」とボルマーは思った。

しかしながら突然、「これがあの日本のサムライ(残虐な軍人)なんだ!」と思うと、恐ろしさで全身がゾクゾクと震えた。そして「この人たちが戦争を起こし、その戦争のせいで、うちのお父さんは猪に噛まれて死んでしまったんだ」と気づいた。

(三一四四)

ボルマーの父親が戦争のせいで亡くなったというのは、大祖国戦争当時、ソビエトの前線に援助物資として猪を贈るために近くの山に狩りに出かけたが、戦時中の物不足で銃の弾丸がほとんど無く、ナイフで手負いの猪に立ち向かったため、逆に噛み殺されてしまったことを指している。

ヤマダがナムハイに連れられてきたのは、彼がモンゴル語を理解できる唯一の日本人だったためである。そこで収容所の倉庫部に定期的なきて、捕虜に食料、衣類、寝具などを配給する仕事をナムハイとともに担当することになったのである。ヤマダがなぜモンゴル語が話せるのかは、ボルマーとの話の中でも少し出てく

るが、小説の後の方になって看守のポルドーンとの雑談の中で具体的に明らかにされる。

「ところでヤマダ! あんたはどこでモンゴル語を学んだんだね?」  
「僕は、まあその、大阪外国語学校の蒙古語部で勉強したんですよ。そして『ノモンハン事件』の後で……」

「その『ノモンハン事件』てのはいったい何だい?」とポルドーンは不思議そうな顔で尋ねた。

「何だいつて、(一九)三九年にハルハ河で戦った……」

「ああ、ハルハ河戦争のことかい? それならあんたはあのナムハイの足を撃った男なんだな。」

「僕が撃ったわけじゃないですよ。僕はその後また学校に入って勉強しました。」

「それじゃあ、どうしてまた戦いに加わることになったんだね?」  
「どうもこうも。(一九)四四年に満州国軍のバルガ部隊に通訳としてきました。そして熱河で捕まったんです。」

(四一五一―五二)

ヤマダの話す日本人独特のモンゴル語、すなわち「B」を「R」で発音してしまう癖(例えば Bayarlataa → Bayarraa, bol → Bor, bolnoo → bornoo など)を、作者ガンバトがヤマダの話すモンゴル語の中で忠実に再現しているのは興味深い。

ボルマーとヤマダが最初に直接言葉を交わすことになるのは、ボルマーの家の子牛がいなくなったことがきっかけだった。いなくなった子牛は、ジャガイモの地下貯蔵庫の建設現場に繋がれているところを発見される。ニヤムジャブはそれは捕虜の誰かが食

用に盗んだものだ」と決めつけ、日本人の隊長に犯人を処罰するよう要求する。隊長は数人の兵士に説明を求め、何人かに鉄拳制裁を加える。そして、ニヤムジャブといっしょにきていたボルマーに、子牛が迷い込んできたが穴に落ちると危険なので繋いでおき、その内に持ち主が取りにくるだろうと思つて放つておいたそ  
うだが、まことに申し訳ない、と謝罪する。これをボルマーに通訳したのがヤマダだった。この場面は、日本人捕虜部隊の厳格な規律と隊長のボルマーに対する紳士的態度が際立っている。

ボルマーはここで初めてヤマダと話し、ヤマダにいつでも家に立ち寄るように言い、ヤマダもあんな風に隊長に殴られるのだからかどかつかうのである。これ以後、ヤマダはナムハイに連れられて、たびたび倉庫部にやってくるようになった。かくして、

日本人の捕虜がハラヘ地方にきて二カ月が過ぎたが、労働に専念して問題も起こさず、逃亡や反抗もなかったため、最初の頃を考えると、監視の目もそれほど厳しくなくなった。とりわけ、ヤマダのようにモンゴル語が話せる、目には憂いが浮かんでいるものの、顔には微笑みを絶やさない人物にとつて、ハラヘ地方というのは、ウランバートルの悪臭に満ちた監獄のことを考えたら、北海道と同じようなところだったのであろう。(二一六五)

ただし小説の後の方では、ヤマダが遠くに富士山を望む地方の出身であることが明かされる。それはヤマダが倉庫部にやつてきて、小麦粉の入った重い袋を倉庫の棚に搬入する作業を一人で手伝つた後、ボルマーのゲルでお茶を飲みながら語る場面に出てく

る。ヤマダには珍しい身の上話である。

「ヤマダ！ 家のことが恋しいの？」

「もちろん恋しいさ。馬だつて自分の故郷を恋しがるんだからね。」

「奥さんも子供さんも元気なんでしょう？」

「僕には妻はいない。妻をもらう金もない。でも母と妹がいるんだ」とヤマダは言う。懐の中から札入れのような物を出した。そしてその札入れのような物を開け、角が折れ曲がった一枚の写真を取り出し、愛情に溢れた眼差しでちよつと見て、一度溜息をついてからボルマーに渡した。

野菜の温室に被せる藁のような屋根をした低い小さな建物の外に、年配の婦人と十歳くらいの女の子が立っていた。建物はあまり見栄えはしないが、母と娘の二人が着ている服はなかなか立派だった。見たところ農民に違いない。

「僕の母と妹だ。」

「ええ。あなたはお母さんにそっくりね。」

「そうかなあ？」とヤマダはたいそう嬉しそうな顔で尋ねた。「後ろが僕の家で、そのずつと向こうに富士山があるんだ。」

「何ですって？」

「フジヤマ。天の山のことさ。雪に、いつも雪に覆われた山なんだ。」

「ああ、山のこと？ 本当にそうね。万年雪の山なのね。」

「そうなんだ、僕の家はそこにあるんだよ。」

「あなたは生きているんだもの帰れるわ。ちよつと馬を走らせれば帰れるわよ。」

「そうだな。そうしたらどんなに素晴らしいことか。」

ヤマダはまさに今、出発でもするかのように喜んでた。



出来ることなら東の方に移動して行く雲に乗って、母親の元に行きたかった。それももつともな話だった。

『かわいそうに、お母さんと妹さんのことを思い出しているんだわ。ひよつとしたらこのヤマダが戦死してしまつたと嘆き悲しんでいるかも知れないわ。でも故郷はあまりにも遠すぎる。もしも近かつたら、ポルドーンが寝ている間に、ヤマダを私の家の斑の馬に乗せて行かせてあげるのになあ』とボルマーは考えていた。

(四一四九―五〇)

ヤマダがハラ―収容所に抑留されている間に、彼とボルマー、そしてニヤムジャブ、ナムハイを巻き込んだ事件が突然起こる。それはヤマダとナムハイが倉庫部に小麦粉を取りにきたときに起こつた。馬車の荷台に小麦粉の袋を積み込む作業が一段落したところ、ニヤムジャブが酔っぱらつてやつてきたのだ。そして、収容所の幹部食堂にジャガイモを届けろという命令をまだ実行していなかつたナムハイを叱責する。ところがナムハイは、日本人捕虜に小麦粉を届ける方が先だと反駁し、二人の口論は徐々にエスカレートしてゆく。ニヤムジャブはナムハイを日本人の肩を持つつスパイだとのしり、怒り心頭に達して、とうとう腰に下げていた拳銃をケースから引き抜いて取り出す。

すると拳銃のバーンという発射音が聞こえ、ニヤムジャブ自身は馬上から地面に転がり落ちた。ボルマーは恐怖のあまり、初めは何が起つたのかわからなかつた。

ニヤムジャブがナムハイを脅かそうと怒鳴りながら拳銃を向けるとき、ボルマーのそばに立っていたヤマダは、猫のように飛び

かかつて、拳銃もろともニヤムジャブを馬の向こう側に蹴落としただつた。馬上にいる人間をどうやって地上から飛びかかり蹴落としたのか、ボルマーは見えていたのに、ほとんど信じられなかつた。

(三一六七)

ヤマダに拳銃を奪い取られたニヤムジャブは、恐怖のあまり酔いもすっかり醒めて、ナムハイとボルマーにヤマダから銃を返してもらおうよう懇願する。ナムハイの求めに素直に応じて、ヤマダはナムハイに銃を返すが、ナムハイ本人はその拳銃で撃たれそうになつたわけだから、ニヤムジャブに銃を返すはずもなかつた。ニヤムジャブは捨てぜりふを吐いて仕方なく収容所本部に帰って行くが、ヤマダとナムハイ、特に拳銃を奪つたヤマダが厳しく処罰されるのは必定だつた。そしてその場に居合わせたボルマーとハンドも取り調べを受ける可能性があつた。そこでナムハイは、ニヤムジャブから銃を奪つたのはヤマダではなく自分だという風に全員が口裏を合わせることを提案する。ヤマダは嘘は言えないと反対したが、結局ナムハイの提案に従うことになる。

「ヤマダさん！ ナムハイ兄さんの言うことを聞いてやってくださいい！ お願いします！」とボルマーは言った。そしてヤマダに近づいて行き、「私はニヤムジャブのことを知っています。あいつはとっても悪い奴です。どうか私の言うことを聞いてください！」と懇願した。

ヤマダは何も言わなかつた。ボルマーを見つめていたが、やつと頷いた。ボルマーがもう一度よく見ると、ヤマダの目には涙が光っていた。『かわいそうに。やはり軍人なのね。嘘がつけない人

「なんだわ」とボルマーは思った。そして何となくとおしくなり、ヤマダのことを抱きしめてその胸元に顔を埋め、心の底から思いつき泣きたいと思った。(三一七〇)

その後ナムハイは厳しい取り調べと拷問を受けたが、自分がやつたと言いつづけた。ボルマーも収容所の内務省全権代表ガラム(バラムIIガラム)に呼ばれ、脅したりすかしたりされたが、ナムハイが拳銃を奪ったという供述をくり返した。そして結局、ヤマダにもナムハイにも、そしてボルマーとハンドにもお咎めなしとなった。この背景には、内務省全権代表のガラムが、近々ウランバートルの内務省本省に呼ばれて表彰される予定だったので、自分の監督不行届になるような案件は避けたかったということがあげられる。出所したナムハイは拷問の後遺症で体の節々を痛め、体調を崩してしまう。ボルマーはナムハイの体に良いと聞いて、漢人の老人から漢方薬を手に入れたり、その漢方薬はナツメの実と煎じて飲めばより効果的だということで、ナツメの実を手に入れるために、増水したハラール川を渡ってロシア人女性収容所の購買部に出かけたりして苦勞する。

秋のある日、ボルマーはヤマダを連れ、牛車を引いて水車小屋に向かう。倉庫の小麦粉が切れて、日本人捕虜が饅頭も作れない状態だったので、新たに粉を引いてもらうためだった。ボルマーは自分の斑の馬に乗り、ヤマダは牛車、そして彼らの後に看守のポルドーンが従う。ボルマーとヤマダは道中、「雪」「火山」「桜」「蒙古班」「かささぎ」等々、取りとめもない話をしながら進んでゆく。ボルマーが日本人、モンゴル人、朝鮮人に共通して「蒙古

班」があることを知らないのです、ヤマダが「大きくなったらわかる」と言うと、ボルマーは腹を立ててしまう。

ボルマーの最も嫌いなことは、自分が子供に見られることだった。ボルマーは自分ももう成人し、一家を率いている人間だと思っている。だから誰にも軽蔑されたり馬鹿にされたりはしなないと思っていた。しかし、最も真実に近い話をする人だと思っていたヤマダが、彼女のことを子供だと言っているのだ。(四一七七)

ボルマーは少し腹が立ったが、やがてそれも忘れ、日本に思いを馳せる。日本という国はまるで別世界のように思えるが、モンゴルの昔話に出てくる須弥山のような大きな山がきつとある、そしてきつと乳海のような大きな海もあるのだ、と。

「ヤマダ！ 私が歌を教えてあげる。私のことを思い出したら歌ってね！」

「うん、わかった。教えてくれ。」

「国に帰ってから、モンゴルやこのハラール川のことを思い出すことがあつたら、歌ってね！」

「うん、そうするよ。」

「あなたはきつと私のことなんか忘れてしまわね。」

「そんなことはないよ、ボルマー。僕は絶対に忘れない。」

「ヤマダが故郷に帰つたら、私のことなんかどうやって思い出すと云うの。故郷のきれいな娘たちの中に入れば、牛糞を掃除したり、悪臭の漂う倉庫の番をしたりする私のような見すばらしい娘のことなんか、きつと忘れてしまふに違いないわ」と思うと少し悲し



いような気がした。そして何となく目に涙が浮かび、泣きたいような気分になってきた。  
(四一七七)

水車小屋に着き、粉を引いてもらっている間、ヤマダはハラハラに潜って素手で魚を捕る。ボルマーはその姿をはらはらしたり感心したりしながら眺めている。ヤマダが捕まえた魚を川岸に放り投げるたびに、ボルマーは笑いながら逃げまどう。

ヤマダが川から出てきた。夏の間に赤銅色に焼けた裸の体を水滴が真珠のように流れ落ちていた。ボルマーは急に悲しくなった。ボルマーが笑うのを止め、悲しそうな顔で座っているのを見たヤマダが聞いた。

「どうしたんだい、ボルマー？」

「何でもないわ……」

「いや、悲しそうな顔をしているよ……」

「笑いすぎたからなの……」

「笑うのは素晴らしいことじゃないか……」

「私は運が悪い人間だから、笑うのは似合わない……」

「どうして？」

「必ず泣いてしまうから」

「どうしたんだい？ 素晴らしいことじゃないか。人間は良いことだけを思っていかなければならないんだ。そうすれば苦しみも軽くなるし……」

「そういうものかしら？」(四一八二)

引き終わった小麦粉を牛車に積み、ヤマダとボルマーとボル

ドーンの三人は水車小屋を後にして収容所に向かう。途中ハラハラ川の岸辺でお茶を沸かし、取ったばかりの魚のスープを作りながら小休止する。ボルマーはお茶を飲みながら、何かを予感したかのようにヤマダに話しかける。

「私たちはもう会えないんでしょうね、きつと！」

「会えるさ。また会うために生きてゆかなければならないんだ！

生きてゆけば、すべての苦しみを乗り越えてきつと会える！」

(四一八五)

焚き火を囲んで休んでいる三人のところに、ニヤムジャブが馬に乗って突然現れる。例によって悪態をつきながらポルドーンを叱り飛ばし、日本人捕虜を乗せて出国するトラックが待っているから、ヤマダを連れて早く行けと命令した。

ボルマーはめまいを感じた。「先ほど焚き火のそばに座ってマンガル山と富士山について話していたのは、別れの前兆だったとも言えるのかしら？ ヤマダはこうして去って行くと言うの？ いつも微笑みを浮かべた親切で優しいヤマダは、こうして夜の間に溶けるようにしていなくなってしまうと言うの？ ヤマダが早くお母さんの元に戻ればと思いいつたいどれだけの夜、拜んで過ごしたことだろうか？ でも今まさに出発の時がくると、慣れ親しんでどうしても別れることができない。またニヤムジャブとポルドーン以外の人の顔を見ることもなく、このまま倉庫部の管理人をしながら年老いてゆくと言うのだろうか？ あの乳海を渡って須弥山に行く夢はどうなったの？」ふと気がつく、ボルマー

はヤマダの胸元に顔を埋めていた。ヤマダは喜びと悲しみの入り交じった声で「大丈夫だよ、ボルマー。富士山で会おう。天の山に行こう」と呟き、ボルマーの頭を撫でていた。ヤマダの頬を伝って、ハラール川の水滴のように清らかな涙が流れていた。

(四一八七)

いよいよ出発の時が迫ると、ボルマーは父の形見の金の指輪を外し、受け取りを拒むヤマダの手に無理矢理握らせる(これ以前にもボルマーは、父の形見の革手袋を手伝いのお札としてヤマダに贈っている)。

「さあ、早く受け取って！ この人たちに見られたら取られてしまわよ！」

「ボルマー！ 生きてゆかなければだめだよ！」

これがヤマダの最後の言葉だった。

(四一八八)

こうしてヤマダは看守のポルドーンとともに去って行く。後ろを何度も振り返りながら小走りに駆けて行くヤマダは、柳の木立の中に消える。これがボルマーが見たヤマダの最後の姿だった。その姿は彼女の心の中に永遠に残ることだろう。

さて、物語はここで終わるかに見えたが、実はまだ続きがあった。ハラール川の岸辺に残されたのは、ボルマーとニヤムジャブの二人だけだった。ボルマーとヤマダの別離を横目で見ながら、魚のスープにかぶりついていたニヤムジャブは、食べ終わるとボルマーに襲いかかった。ニヤムジャブはボルマーがすでにヤマダと

肉体関係を結んでいと疑っていたが、実際はそうではなかった。ヤマダにとつてボルマーは妹のような存在で、彼女に対する感情は恋愛感情とは言えなかった。またボルマーも、ヤマダに漠然とした憧れと哀れみの交錯するような感情を持っていたのではなからうか。

乱暴されたボルマーは寝ながら泣いていた。ニヤムジャブは満足したように横になっている。ボルマーがふと手を伸ばすと、ニヤムジャブの例の拳銃ケースに触れた。そして拳銃をひそかに抜き取ると、何も知らずに話しかけてきたニヤムジャブに向けて発射した。そして銃を川に投げ捨てた。

ボルマーは起き上がって振り返り、マンダル山の頂を眺めた。純白の雪が頂に輝いていた。須弥山の頂のように……富士山の万年雪のように、白く輝き続けた……

生きてゆかなければならなかった！……(四一九〇)

おわりに

前節で日本人抑留者ヤマダを中心にガンバトの小説「生きてゆかなければ」を見てきた。この小説にはこの他にもハラール収容所をめぐるさまざまな人間模様が描かれている。特に、一九三七年秋の大量粛清で収容所の内務省全権代表ガラム(バラムIIガラム)の犯した数々の悪行、さまざまな粛清犠牲者たちのエピソード、ハラール地方にあったロシア人女性収容所の実態、野菜貯蔵庫管理人ナムハイのハルハ河戦争体験、最後はボルマーに殺されてしまう看守長ニヤムジャブの救いがたい生き方など、興味深い話

題が尽きない。ここでそれらを一つ一つ紹介できないのは残念である。またヤマダが、モンゴル人には荒唐無稽の、と言うよりも、彼らの民族的自尊心を逆なでする「チンギス・ハーン」源義経同一人物説」をボルマーに語ったり(四一五二)、ボルマーの心には「天照大神」が宿つていると言ったり(四一八五)する場面があるが、これらもモンゴル人作家が書いている点で興味深いし、モンゴル人読者の反応も気になるところである。

ところで、ヤマダにとってボルマーとはどんな女性だったのだろうか。彼自身のボルマー評を聞いてみよう。

気立ての優しい心清らかなボルマーと一日中いっしょにいられるのは幸せだった。ボルマーといっしょにしていると、自分の興味のあることが全部聞けるし、思ったことが全部話せた。また、心の中にいささかの悪意もないことを表すかのように、ボルマーが明るい声で笑うのも素晴らしかった。自分自身父親がいなくて貧しいのに、どんなことでも出来るだけ人の助けになろうと思ひ、純粹で誠実な知性をもって世の中を眺め、常に真実の側に立とうとする女性だった。また彼女の二重瞼のつぶらな瞳は、慎み深くいつも黒く輝いて見えた。(四一七四)

ボルマーにとってヤマダは憧れの対象であり、また捕虜という同情すべき存在でもあった。困っている人を見れば助けたいと思うのがモンゴル人のモンゴル人たる心性なのだ。最後は殺人まで犯してしまったボルマーの運命が今後どうなるのかはわからない。だが、いずれにせよ、小説の題名にもなった「生きてゆかな

ければ」ならないというヤマダの言葉は、彼女の心に深く刻みつけられたはずである。

このガンバトの小説の芸術的な完成度に関してには、いろいろな意見があるだろうが、従来のモンゴルの小説にはなかった斬新な素材が随所に見られることは確かであろう。ガンバトの作品集を監修したL・トゥデブは、「生きてゆかなければ」という小説は、これまで読者も作家も覗いたことのない一つの世界を、まったく思いも寄らない『望遠鏡』で眺めて書いた作品である」(6)と比喩的に述べ、この小説の新しさを指摘している。

#### 註

(1) 一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけて行われた、モンゴル文学をめぐる「変革と刷新」の状況については、次の拙論・拙訳を参照されたい。G・アキム「砕けることなき宝石ービヤムビン・リンチェン」(『日本モンゴル学会紀要』、第二〇号、一九九〇年)、「反逆の詩人レンチニー・チョイノム」(『東京外国語大学論集』、第四二号、一九九一年)、「モンゴル現代文学史の光と影」(『月刊しにか』、第三卷第一〇号、一九九二年)、「モンゴル作家同盟の分裂」(『東京外国語大学論集』、第四六号、一九九三年)、「方便と般若ーモンゴル現代文学史の再検討ー」(『東京外国語大学論集』、第四八号、一九九四年)。

(2) このシンポジウムと展覧会の資料として、『ドキュメントー日本

人のモンゴル抑留』(朝日新聞社、一九九五年)という資料集(全五八頁)が公刊された。またシンポジウムにモンゴルから出席した歴史家のS・イデシンノロフは、その著書『ウランバートル市小史』(一九九四年刊)の中で、第二次大戦後のウランバートルの都市建設に日本人抑留者が動員され大きな役割を果たしたことに言及している。S.Ishimnurov. <<Ulaanbaatar khotyn tükhiin khuraanguin>>, Redaktor Ch.Dashdavaya, Ulaanbaatar, 1994, p.120.

(㉞) R.Ganbat, Am'd yavakh kheregtei, <<Tsovg>>, 1991, No.3, pp.21-72; <<Tsovg>>, 1991, No.4, pp.38-90.

この小説は後にガンバトの次の作品集に収められた。R.Ganbat, Am'd yavakh kheregtei, <<Alag mor>>, Redaktor L.Tüdev, Ulaanbaatar, 1996, pp.144-271. 本稿では『ツォグ』に掲載されたテキストを使用し、引用部分末尾の( )内の数字、例えば(四一五一〜五二)は、第四号の五一〜五二頁を指している。

(4) そのような作品の代表例として、ダシゼベギーン・センゲー(一九一六〜一九九五年)の一九四七年度国家賞受賞作品「アヨーシ」をあげることができるだろう。中編小説「アヨーシ」は、一九四五年八月の対日戦で死去した実在の英雄L・アヨーシの戦いを描いた小説であるが、小説に描かれた日本の軍人たちの姿は、センゲーが八〇年代末まで一定の大きな影響力を持った詩人・作家だっただけに、彼に続く作家たちの描く日本人像に一つの典型を提供したことは十分に考えられる。小説「アヨーシ」に描かれた日本人像については、次の論文を参照されたい。山口幸二「D・センゲー『アヨーシ』(一九四六年)に描かれた日本人像」(『モンゴル研究』、モンゴル研究会、第八号、一九八五年)。また日本人特務機関員を描いた作品としては(モンゴル側から見ればモンゴル人チェキスト)秘密警察・諜報員を描いているわけだが、ドジョードルジ(一九三〇〜)の一連の小説や脚本が最もよく

知られている。

(5) 原題 <<Shuvuud butsakh nama>>. 一九九二年制作、監督L・バルフジャブ、脚本N・ジャブザンドラム、Ya・エンヘー、配役S・チムゲー(ムンフマー)、P・バヤルフー(アキラ)、Ch・アビルメド(バルダン)。ところで、この映画の制作と同じ頃ウランバートルに滞在していた日本人留学生S君(当時本学モンゴル語学科在籍)に、日本人抑留者役で映画出演の依頼があったという話を本人から聞いたことがあるが、それがこの映画のアキラ役だったのかどうかは定かではない。

(6) R.Ganbat, Am'd yavakh kheregtei, <<Alag mor>>, Redaktor L.Tüdev, Ulaanbaatar, 1996, p.5.